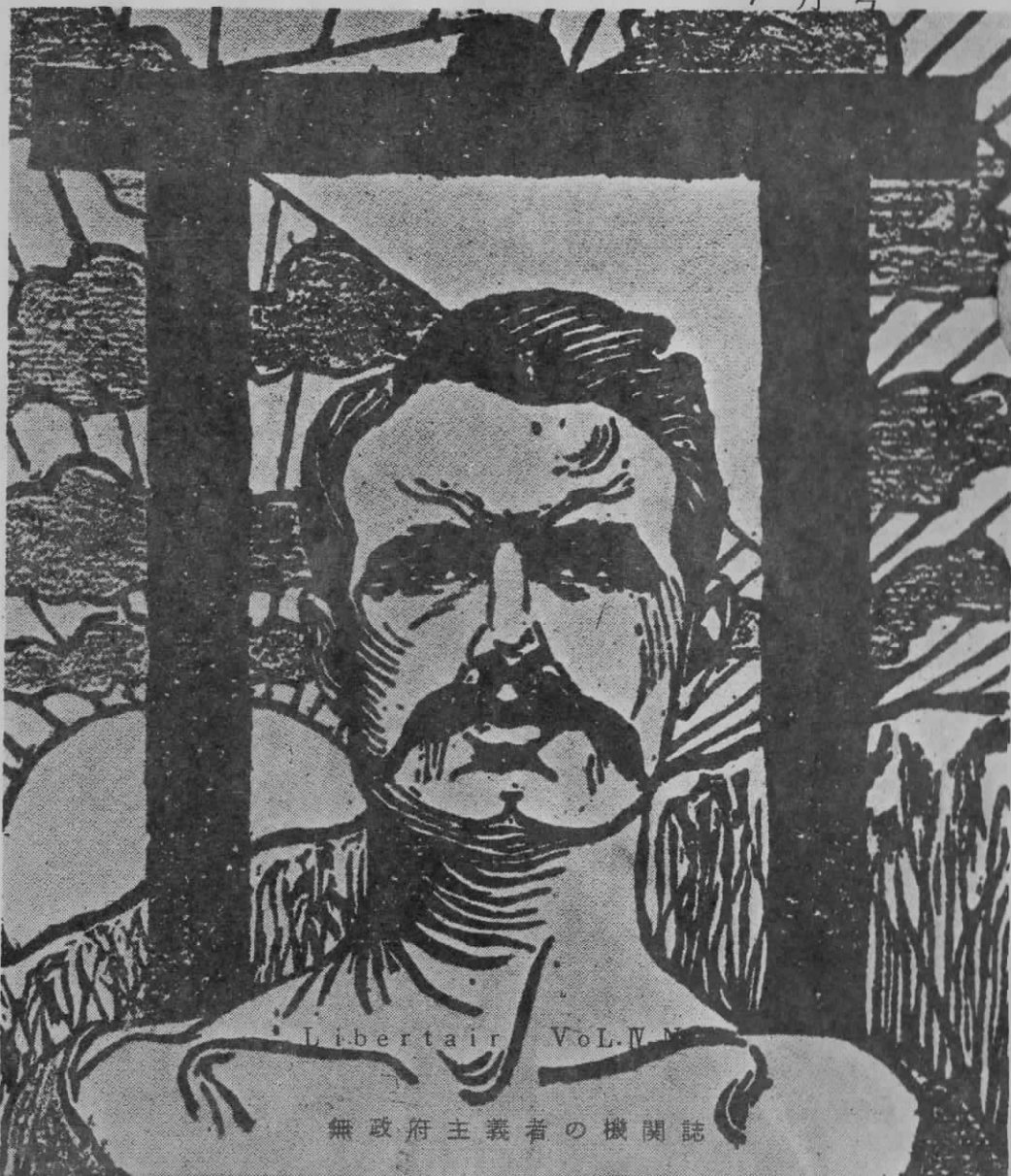


毎月一回 15日発行昭和 48年7月15日発行・第 43 号（昭和45年9月4日第三種郵便物認可）

リベルテール

7 月 号



無政府主義者の機関誌

和四十五年九月 四日第三種郵便物認可
年七月十五日發

三五一〇〇円（送料共）

リベルテール 一部 100円

Le Libertaire 毎月一回15日発行

昭和48年7月15日発行 VoL, IV, No 8

編集兼発行者 三 浦 精 一

発 行 所 東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

（振替東京133830番 三浦精一）

リベルテールが創刊されたのは一九六九年十二月で、その創刊号には「アナルシズムは永遠の思想であり、普遍の思想である。これを歴史的、地理的、社会学的、経済学的に究明しようとする意欲的な若いリベルテールが全国的に、国際的に結ぶ機関である」ことを宣言した。

それから三年、リベルテールはまだこの期待を実現しているとは言えない。しかしリベルテールは、アナルシズムが自由、平等、友愛という昔ながらの三原則に立って、最高の秩序アナルシーを実現しようとするアナルシスト（リベルテール）のグループであることに変わりはない。したがって現代社会の階層的権力構造を、人間の狡知と欺瞞にもとづくものとして否定し、万人一人一人の生の充実を実現しようとする社会的な変革を目指すものであることにおいても変わりはない。

こうした変革への過程において暴力、非暴力の二つの手段が考えられる。しかし暴に対して暴をもってすることが、如何にも勇壮で合理的で容易だとしても、暴力を用いること自体が他に対する権力行使であることを知るがゆえに、リベルテールは非暴力を立場とする。もちろん暴力と非暴力の境界は微妙だということ、非暴力は暴力主義以上に困難な道であることは承知の上である。この立場で連合し、連帯し、反権力、反戦の戦を戦かう（三浦）

目次

アナルシーとは何か 131
生の変革

ピエール・ジュヴァンタン

ミゲル・ガルシア著

『フランクの囚人』について

サム・ウィーナー

清水君に懲役五年の判決

野火

10

8

5

1

アナルシーとは何か 131 生の変革

ピエール・ジュヴァンタン

よう。取り巻く妨害者たち、自分の欲望を制限することもできない無責任な人たち、深刻な顔つきで笑う皮肉屋たちを評価するために、プラトンからド・ゴールにいたるまで、すべてのまじめな人々の口の端にのぼる、すべての侮蔑の塩を味わうことにしよう。私はみずからアナルシストとは称しない。でも私は人がそう呼んでくれることは好きだ。

私としては、アナルシストは、ある程度、いつでもみずからをなくさめるお人好しに見える。しかも何のより好みもせず、『重大な』物事、当然だとされた必要事、われわれを釘づけにして大きな機械装置の小さな歯車にする数知れぬ偶発事などに心を奪われないお人好しだ。そしてまたすぐに、個人の満足は私にとっては社会の安定にもなうものではなく、アナルシーは実に無秩序に台致するものだと言います。社会的秩序はいつでも一つの方向しか持たない。私はそれについてどうしようとも思わない。道は二つしか無いのだから、私はむしろ生ける死者共に称賛されるよりも被害者になる方を選ぶ。

事実、通俗な意味での『アナルシー』は無秩序の同義語である。クロボトキンあるいはセバスチャン・フォーが通俗化しようと思った学者的な定義を、心にとめることを喜ばなかった民衆を、もう一度信頼することにし

しかしこれは本当に選択しなければならないからだ。私にとっては結局のところアナルシズムは、むしろ幸福の科学である（もしこの幸福という語が気に入らなかったら『もっとも永続する快楽』としたまえ）。

純真で真面目なアナルシストたちは、この新しい科学の基礎を置こうとした。それは、その理性だけが支配する一つの道德制度を再発見するために、彼等の教育や隔世遺伝を一掃しようとする彼等自身の経験的主題であった。カント、デカルト、そしてその他もろもろが路傍にたちどまった。彼等としては究極まで、神なる人にまで追及しようと思ったのだ。あらゆる既成ドグマは容易に捨てられはしない。大部分の者は公認羅針盤なしで進むことを恐れる。多くのものはそれをアナルシストの羅針盤にするために文字盤を描きかえる。あるものたちはしばしば、その位置を定めながら『夜通しの旅』を続けた。もし誰かが私の視角を選んだとしたら、その人は、たとい伝統に重苦しく糊づけされていても、黒旗の後から走るの、もうただ一人だけではないことを知るのだ。自分ではそれと知らないで、あるいはそれを誤解しながら、人々の諸集団はそれぞれに、そして思い思いに、そして別々の方法で、人間の謎の鍵を探して来た。結局のところ彼等がもたらしたものはいくつかのパズルの断片

に過ぎなかった。その幾つかの目録をつくって見ることにしよう。

すでにギリシャでは最大のパズルの断片が知られていた。古代の哲学者たちはこの学問を区別することさえ知っていて、これに『知慧』という名をあたえた。エビク로스派、ストア派、そして特にキニク派は、『人間は万物の尺度である』（プロタゴラス）といったような言葉をちりばめた輝かしい、深奥な教えをわれわれに残すという大きな功績を立てた。

ルネッサンス以後、とくに天才ラブレールのかた、ひとつの新しい推進力がフランスにあたえられた。この推進力は十八世紀に百科全書家において成熟に達した。ルソーはその読者層によって決定された独特の地位をしめている。現代においてもなお、彼のもっとも純真なものの幾つかは『左派』にとつては信条である。（『人間は天性は善良である。それを腐敗させたのは社会である』）労働運動とアナルシズムの歴史は、狭い意味では、とくにフリーエをもって始まっている。この二つはもっともしばしば混同される。しかし、ダニエル・ゲランのように、『アナルシズムは社会主義思想の支流の一つに外ならない』というのは間違いだ。事実、単に幾人かの急進的な人物によって代表される、個人主義者の流れも存在

している。それについてはさらに語ることにする。ある歴史家たちがするように、アナルシズムを、一八七二年のハーグの大会でのマルクス主義者によるバクーニン主義者の歴史的追放から派生させることも、間違いだと思はれる。これは、その主張する組織というよりも、たがいに相反する二人の党主の感情だった。これは個人の喧嘩だと言って悪かったら、社会主義一族同志の喧嘩だったのだ。ブルードンとゴッドウィンはそれ以前に存在していた。

アナルシズムの歴史の中で私を引きつけるのは、たくさんさんの大事件ではない。―それらは事実において挫折でしかない。（第二インタナショナル、ウクライナ、クロンシュタット、スペイン）、これらは（アナルシスト党派、アナルシスト軍隊、アナルシスト政治家、アナルシスト工場）を隠しているものである。私はまた『ボノ団』の類の歴史が好きだ。（私はアナルシストとして―多分ボノ以外の―団員を知っている）、というのは彼等の可哀そうな、そして同時に崇高な有為転変の中に、私はこうした失敗の、しかも破壊に終った経験の、すべての教訓を捕えるのである。爆弾の時代は過ぎたが、アナルシストの運動は圧力鍋のままである。その中で一人一人が自分自身の思想によって、自分自身の血で、自分自

身が経験している。バリケードの上で、または警察で、テレビの前で家族そろって、またはホテルの室でただ一人、こめかみに弾丸という最後になり得るのである。

芸術は平行線の、そして地下の進行を続けて来た。芸術は後に続いて来る者たちの道を照らしたボードレールが書いたように、『灯台』守たちの道に散らばっている。詩はそこで、卓越した役割をはたした。ヴィヨンからラッポールまで、詩は引き続いて『予言者たち』を生み出した。この人たちは層一層と確実に、人間の精神の要求をむき出しにしようと試みた。

詩と日常生活との間の大きなずれは、ダダイズム、シュルレアリズム（特にアンドレ・ブルトン）、レトリズム等々といった結合の試みに導いた。こうしたものは『演技的』シチュアシオニスト（情況主義者）たちのなかに政治的表現を見出さねばならなかった。広汎なそして根本的な総合によって彼等はリベルテールの思想を更新した。彼等の主要な貢献は『日常生活の批判』であった。日常生活は、本当は、通俗化を行ない得なかった個人主義アナルシストの思想家たちが、（『個人の奪回』や『性的革命』といったように）回復していたものだった。

註、ボノ団はスチルナー主義で盗賊行為を行ったと言われる。

レトリズムは、芸術的、文学的理論であり、一定の順序に配置された諸文字の、音声だけ、または外形だけによって詩や美術の構成を行なうもの。

個人主義アナルシズムの潮流は、革命前夜とか未来社会への信望といったような奇跡的解決を拒絶することによって少しづつ集団主義的（共同、集産、共産）潮流を抹消した。そして、それらの新キリスト教的なすべての逃げ口上や睡眠薬を告発した。すなわち、大きな期待の大革命を待ちながら、どう生きるんだ。集団的にやる前にその個人的革命をしなくてはならないのではないか。容器の中味を変えるためには、貼紙を変えて、国家の所にリベルテール社会を糊付して、それで充分なのか。工業的生産性はリベルテール共産主義連合主義の方法とは異なった方法を要求してはいないか。自由への愛と労働への愛をどう折合わせるのか。強制手段の自治管理がそれを陽気なものに変形できるか。そして、それから、社会主義のこの楽園にどうしたら到達できるか。とるに足りない宣伝で、操作されるマスメディアに対抗するの。プロレタリアの革命的暴力でその解放のためにそれを闘かうのか。等々々々……。

個人主義アナリストたちは、その銃口よりもはるかに遠いところを見ようとした。だがその大きな明晰性が

大衆から切りはなされたベシミストにするのだった。彼等がキニク主義（犬儒主義）と楽観主義を調和させるにいたったとき、スチルナーやニーチェといった越えることのできない結果に出会うのである。個人主義アナリストの大きな理論的集積は、一九六八年五月に多大に再現されているのを知れば、失われてしまっただけではないからである。

哲学、文学、芸術、そして政治学と呼ぶにふさわしいものに對して、一言科学を語ることにしよう。物質的諸科学からは物質的幸福の改良以外は何一つ引出すことはできない。自然科学は、反動を望んでいたはずの人々にとっては、そこから、人間のあらゆる思考の出発点を証明しているダーウィンの進化論以下しか提供していない。自分の過去の動物祖先にどれだけ捕えられているかを知らないで、実際、どのようにこの生きている存在を語るのか。生態学を語らずして、どうして環境が語れるか。生態学を考えないで、どうして非暴力、反軍国主義あるいは集団主義を語れるか。人文科学は、それ自体として貧困なことが逆説的に証明されている。人文科学は少し民族学的、社会学的、そして精神的分析であるために大いに求めねばならないはずの誠実性と目的性の欠除、アカデミックな偏執といったものを示している。

もちろん、私が触れた来たそれぞれの問題に関して、

言うべきことはたくさんあるのだが、そうしたことはいくつとは思わない。私が示したかったただ一つのことにはアナルシズムはゲットー（イタリア語でユダヤ人地区を

ミゲル・ガルシア著

『フランコの囚人』について

サム・ウィーナー

会報第二号は、ミゲル・ガルシアの著書『フランコの囚人』の書評をのせている。この本は非常に重要な、そして印象深い本であり、またアメリカ合衆国では手に入りにくい本でもあるので、それから概要を抜書して印刷することにした。以下はミゲル自身についてのノートで、彼が捕えられる前の活動について書いたものである。

X

スペインの一アナキスト、ミゲル・ガルシアは一九四九年十月二十一日に捕えられ、公判に付されて、その八人の同志とともに死刑を宣告された。死刑囚監房で三十八日間を過ごした後で、三十年に減刑された。同志たちの内四名は刑を執行された。二十年後に釈放されたが、すでに老境に入っており、病身で、家族もなかった。しかしその精神は不退転だった。

言うが、都市の中のユダヤ人や黒人、その他の疎外された人々の集団居住地ではない。しかし、それはもっとも実のりの多い全人間実現の試みである。（三浦訳）

ミゲル・ガルシアが、ほとんど四十年にわたって自由のために戦って来たことは、周知の通りである。公開選挙の自由のために、言論出版の自由のために、自由な労働組合を組織する自由のために。スペイン革命戦争で戦った一人で、ミゲルは、その時、印刷工としての経験を活用して、機密書類を偽造したり、レジスタンスのためのパンフレットを印刷したりした。フランコの獄にあってさえ、彼は決して闘争をあきらめなかった。彼は多くの脱獄計画に活動して、常に獄当局者との妥協を拒否した。

『フランコの囚人』は観光旅行者が絶対に見ることのできない一面、すなわち政治犯をすし詰めにした監獄をもつスペインを示すものである。この本は警察国家の醜悪の告発である。しかもそれは誠実と勇気と生き抜いた

人の偉大な人間物語でもある。

ミゲルは一九〇八年にバルセロナで九人兄弟の七番目に生れた。九才で新聞売子になり、十二才のときに印刷屋に徒弟奉公した。彼は終生のONT(全国労働総連合)会員であった。これはスペインのアナルコサンジカリストの労働組合である。一九六九年三月二十二日に出獄して、ガルシアはスペインを去ってロンドンのアナーキスト黒十字の同志の一人となった。それ以来彼は二十年間スペイン人のスラム街に住んで、頑強にレジスタンスの闘争を続けた。ミゲルは語るのだ。

×

私の集団はタリオン・グループ(タリオンは眼には眼、歯には歯という同害報復を意味する旧約聖書の言葉である―三浦)と称した。この名称は―警察や新聞ではタリオン・ギャングと呼びかえていた―戦後のレジスタンスと、ほとんど同じ意味になった。われわれはポルトガルを含めた全イベリア半島の運動のために武器と資料を調達した。われわれは犯罪者なのだろうか。多分そうだろう。世界中のいかなる政府もわれわれには合法性という保障を与えはしない。メキシコ市にある貧弱なスペイン共和国のポール紙政府でさえもだ。世界にとっては、われわれは強盗をたくらみ、政府の建物を爆破する無頼

の徒であり、貧民街のくずれかけた小屋に住む殺人者共なのだ。何百万ものペセタ貨幣が、このみすばらしい小屋に集ってくるが、ビタ一文だって分らなくなりはいのだ。すべてがレジスタンスのためで、その金は銀行にあると同様に、いや、もっとそれ以上に安全なのだ。もしそれを労働組合の名義で銀行に預金したとしたら、ファランヘ党(フランコ主義者の党で、ドイツのナチスやイタリアのファシストに当る―三浦)がそれを抑えるだろう。

誰でもそうだが、レジスタンス・グループが活動を開始したとき、彼等はその資金に一ペセタだって持つてはいなかった。アントニオ・ロベスはリオハとナバルレのONTの代表者で、私が出会った人々の中で一番勇敢な男だったが、工業家たちからの強制寄付政策を始めた。彼は革命戦争の初期の革命の間に、労働たちが占拠して共同化を行った工場の工場主の名簿を持っていた。今は、フランコ政権となつてから、工場主は彼等の工場を取戻しているのである。

ロベスはいつも、支配人たちが逃亡していた間に労働者たちが工場を守ったやり方、またある場合には、労働者管理のもとで工場の価値が三倍あるいは四倍になったことを認めて、その賠償をONTに支払うといった要求

をもって支配人たちを訪問するのだった。しかし、労働者たちに関する限りでは、彼等はすべてを失ったばかりでなく、彼等は今は彼等の利害を面倒見てくれる組合も持たないのである。確実に支配人たちは、こうした理由に対して献金しようと思ったのだろうか。彼等の多くはそうしたのだ。それもすぐにだ。というのは、訪問は夜間おそく、彼等の私宅であり、ロベスは武装して行ったのであった。

ある時のこと、彼は私に、ある医師の事務所、一緒に来るようにすすめた。その事務所は警察の警察部の二階にあった。この医師はフランコの治下を脱出した一群の所有者の財産を手に入れるように工作したし、自分自身の会社の取戻していたのだ。ロベスは五千ポンドに相当する額を要求して、温和に小切手でも差支えないと告げた。彼は医師が一部の彼の持ち分を取得したやり口を考慮して警察に行きたがらないことを知っていたからである。

その医師はすばらしく大きな男だった。ずんぐりしたロベスの上のしかかるようにして、激しく叫んで、警察にすぐくるように電話するぞと言った。ロベスは銃をかまえた。「じゃあ一万ポンドだ。しかも現金だ。君は信用できない奴だと分った」と言った。

医師はすっかりおびえて降参したが、そんなに沢山の現金は彼の家の中には置いていないと言ひ張るのだった。それでも彼は引っかけ集めて七千ポンド出した。

×

私の腕前の結果、ある晩一人のドイツ人教授がやって来た。彼とその妻はユダヤ人でゲシュタポ(ナチスドイツの秘密国家警察)に追われているのだった。彼等は国境を越えた。そして絶望的だった。彼等が必要だったビザに対して、われわれが一文もとうとうしなかったのを知ったとき、その婦人は泣き出した。「人はタリオン・ギャングはアナーキストで、強盗で、犯罪者だと言うのに」と彼女は言った。

「アナーキスト。その通りです。だがあなた方が、私共を犯罪者だと思われるなら、あなた方はあなた方を保護することを国家に要求なさい。あなた方はドイツに警察官や裁判官を持っています―彼等がナチスからあなた方を救うことができましたか。国家が犯罪者なので、私たちはそうじゃないのです……」。

×

われわれが逮捕されて(一九五二)、獄中に坐して新聞売子の声を聞くのを想像した。「タリオン・ギャングの全貌。アナーキスト強盗への判決」。繁華街の通りか

ら通りへ、ランプラスのテーブルに坐った裕福な人々に新聞を売りながら馳けて行く。その裕福な人は満足げにうなずいている。その後、電車に飛び乗って、労働者たちの区域を走り過ぎるとき、その呼び声が少し変る。「レジスタンス闘士への判決」。青白い顔をした作業ズボンの人たちが、二枚の銅貨を出すためにポケットに手を突込むとき、悲しげに頭を振る……。

×

私はスペインで二十年の刑で釈放された。そしてロンドンに向った。船上で快活なイングランド中部地方の夫婦と話を交わした。おそい休暇を持つ余裕のある労働者だった。私は私の英語の練習をしたかった。彼等は私の郷里をたづね、私はバルセロナと言った。「あなたはほんとに幸福ね。私共があなたの美しい国に住めたらと思います」。

「われわれ」がそこに住めたら……。

清水君に懲役五年の判決！

北海道庁赤レンガ爆発事件で、爆発物取締罰則違反で起訴されていた清水君に、7月2日、札幌地裁（佐野昭一裁判長）で懲役5年（求刑同8年）の判決があった。

国をすてた私は政治犯。黙々として政治犯となった人たち、その人たちの沈黙は私よりもっと雄弁だ。

われわれが戦に敗れたとき、戦い続けた人々はレジスタンスになった。だが、世界に対して、レジスタンスは犯罪者となっていた。フランコが法律をつくったからだ。たとえ、政治的反对者を扱ったとしたところで、レジスタンスは憲法によってつくられた法律を破ることを選ぶのだ。そして世界は矢張りわれわれを犯罪者として認める。われわれが投獄されても、自由主義者は何の関心も持たない。われわれがテロリストだからだ。彼等は兵役忌避者たちを防衛する。彼等は無罪だからだ。彼等は暴政に苦しんで来た。しかしそれに抵抗しなかった。私は罪人の仲間にいた。私は戦った。私は投獄され、私は生き残った。最後はもっと異例のものだろう。

（三浦訳）

ただ、未決拘留のうちの150日が算入されている。なお、多摩美大の裏山で発見された手製爆弾5個は、没収された。判決理由の中で、裁判長は「憲法で保障された